

目的 家庭生活が健康的に営まれることは望ましい。人体の営みがさまざまな環境に適応して行われているように、個々の家庭がそれぞれの家族関係、家庭経営その他社会的な環境因子の中で営まれている。従来、家族関係と医学についての研究は伝染性疾患や遺伝という面からみた先天性代謝異常などのものが多くなされているのに対して、他の疾患、特に消化器系疾患を対象とした研究はあまり発表されていない。

演者は、最近、しばしば小児にみられる消化器系疾患が単に消化管壁の生理的機能の不良によるもののみでなく、何か、他のものに由来するものではなからうかと考え、小児科に入院した患者を対象として、二、三の観察を試みた。

方法 東京都内の総合病院の小児科に消化器系疾患で入院した小学生に焦点をあてた。1例は11才(子、小学6年、双子、妹)、他の例は11才(子、小学6年、兄弟姉妹なし)を対象とし、その家族的背景および家庭の運営について観察した。

結果 患者は低年齢であるにも拘らず胃粘膜に潰瘍性物質が見られたが、共に夏運動強などに起因する自律神経失調による消化器系疾患ではなく、家庭の運営や家族関係により誘引されたものであり、これが観察された。小児の消化器系疾患とあわせて、人体の営みと家庭の営みに焦点をあて、従来の家庭経営に関する研究とは異なった角度から医学と家政について考察した結果、個々の生活の営みと個々の家庭の営みはそれぞれ異なった様相を呈しているが、根底においては共通しているものが存在していることを見出した。